

文章題テスト・小説(1)

日 月 名 前

★ 次の文章を読んで、問いに答えなさい。

十歳さいになるまで、キキはまあまあふつうの女の子としてそだってきました。母さんが魔女まじよで、自分も十歳になったら魔女になるかどうか決めなくてはならないとわかっていたのですが、あまりそのことを本気で考えたことはなかったのです。十歳になってしばらくたったころ、友だちが、「あたし、母さんのあとをついで美容師びようしになるんだ」といったのを耳にして、「あとつぎ」ということを急に考えるようになったのです。コキリさんがあとをついでほしいと思っていることはうすうす感じていました。でもキキは、母さんが魔女だからあたしも、とかんたんに考えるのはどうも気がすすまなかったのです。(あたしは自分のすきなものになるんだ。自分で決めるんだ)

キキはそう思っていました。

そんなある日、コキリさんが、

「ちよっとだけ、飛んでみない？」

と小さなほうきをつくってくれたのです。

「あたしが？飛べる？」

「魔女のむすめですもの、だいじょうぶなはずよ」

キキは、そのさそうようないかたがすこし気になりましたが、めずらしさもてつだって、さっそくかんたんな飛びあがりと着地のしかたをおしえてもらうと、コキリさんのあとについて、おずおずとほうきにまたがって、地をけったのでした。

とたんに体がすっと軽くなり、キキは、なんと、空中に浮ういていたのです！

3 「あたし、飛んでる！」

キキは思わずさけんでいました。それは屋根よりたった三メートルばかり



の高さでしたが、とてもいい気持ちでした。空気もほんのすこし青い感じでした。それに、もっと高いところを飛んでみよう、もっと、もっと……そして何が見えるかな、何があるかな、もっと、もっと……とまるで体と心をもちあげるようなふしぎな興味がわいてきて、たちまち飛ぶことがだいすきになってしまいました。

そしてもちろん、魔女になる決心をしたのです。

(角野 栄子「魔女の宅急便」より)

1 線「あとつき」とありますが、キキにとって「あとをつぐ」とはどのようなことを意味しているのですか。次の文の□に当てはまる言葉を書きなさい。



と同じように、自分もしょうらいは魔女になる、ということ。

2 線「うすうす」という言葉の使い方として正しいものを、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

ア ガラスごしに外のようすが、うすうす見えている。

イ それがまちがいだということには、うすうす気づいていた。

ウ 部屋の中に彼がわすれていった本が、うすうすのこっていた。

エ このまま使い続けると、この紙はうすうす足りなくなるだろう。

3 線「あたし飛んでる！」を声に出して読むとき、どのような調子にするとよいですか。もっともふさわしいものを、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

ア こわがっているように、小さな声で読む。

イ びっくりしたように、大きな声で読む。

ウ 感心したように、静かな声で読む。

エ だれかにたずねるように、終わりを上げて読む。



4 線4「空気もほんのすこし青い感じでした」とありますが、どうい
 ことですか。もっともふさわしいものを、ア～エから選んで、記号に
 ○をつけなさい。

ア はじめて空中に浮いたことがこわくて、目の前が暗くなったように感じた
 ということ。

イ 高い場所は地上よりも気温が低いので、空気も少し冷たかったということ。

ウ はじめて空中に浮いたことがうれしくて、空気までさわやかに感じられた
 ということ。

エ 高い場所では空や屋根の青い色がうつって、空気も青く見えたということ。

5 この文章でのキキの行動や気持ちの変化を次のようにまとめました。
 []に当てはまるキキの言葉を、文中から書きぬきなさい。

魔女になるのは気がすすまない。

← (自分のすきなものになるんだ。自分で決めるんだ。)
 コキリさんにさそわれて、ほうきで飛んでみることにする。

← 「
 空中に浮く！」

← 「あたし、飛んでる！」
 魔女になる決心をする。

6 この文章を大きく二つのまとまりに分けるとすると、二つめのまとまりはどこから
 始まりますか。はじめの六字を書きぬきなさい。



文章題テスト・小説(2)

日 月 名前

★次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(小学五年生の宇佐子は、同級生のミキちゃん——ちよっと変わった子でクラスになじもうとしない——のことが気にかかっている。ある日の学校帰り、宇佐子はミキちゃんのをそとつけていった。)

団地の建物は、いくつかのブロックに分けられていて、ブロックごとに垣根の木の種類がちがう。垣根の中は、ちよっと他人の家のニワか何かのような感じがして、入りにくい。宇佐子はからたちの垣根の外側からそと静かな団地の中をのぞいた。三輪車がほり出してあった。

だれのすがたもないだろうと思つてのぞいたからたちの垣根の内側で、ミキちゃんがこちらを向いてすました顔をしていた。いったい、いつ、宇佐子がいるのに気づいたのだろう。宇佐子はミキちゃんと目があつたしゅんかん、まるで小さな動物みたいにびくつとした。ミキちゃんが手招きをするから、宇佐子はそとからたちの垣根の中に入っていった。階段をはさんで左右に建物が並んでいる団地の入り口でミキちゃんは宇佐子が来るのをマっていた。

「ここが家なの。遊んでいって」

ミキちゃんは宇佐子にそう言った。ミキちゃんの家は四階だった。

「ここが家なの」

ミキちゃんはだまっている宇佐子にまた同じことを言った。宇佐子はランドセルのベルトを手でおさえながら考えこんでしまった。ランドセルをせおつたまま遊びに行つてはいけないと学校でも家でも言われていた。そのきまりをやぶつたことはこれまで一度もなかった。友だちの家に遊びに行くのは、



4 線3「宇佐子はランドセルの……考えこんでしまった」とありますが、このとき宇佐子はどのようなことを考えていたのですか。最もふさわしいものを、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

ア ミキちゃんの家には行ってみたいけれど、あまり話したことがないのに
楽しく遊べるかな。

イ ミキちゃんの家には行きたくないけれど、はっきりことわるのは悪いような
気がするし、こまったな。

ウ ミキちゃんの家には行ってみたいけれど、学校帰りに友だちの家に遊びに
行くのはいけないことだし、どうしようかな。

エ 学校帰りに友だちの家に遊びに行くのはいけないと知っていてさそうなんて、
ミキちゃんはいじわるだな。

5 線4「べつのこと」とは、どのようなことですか。次の□に当てはまる言葉を、五字でいどで書きなさい。

ミキちゃんの家には、ほかにも

のでは

ないかということ。

6 この文章から読みとれる「ミキちゃん」の性格として最もふさわしいものを、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

ア 短気で、おこりっぽい

イ 気が弱くて、さびしがりや

ウ 少し自分勝手に、せっかち

エ 気が強くて、負けずぎらい



文章題テスト・小説(3)

日 月 名前

★次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ジャンボの家には、タッチやハマちゃんもアツま^アっていた。みんなでゲームをしながら、おしゃべりのワダイ^イは自然^{しぜん}と、四月のクラス替え^がのことになった。いまは一月の終わり——あと二カ月で、四年生が終わる。五年生に進級^ウするときにクラス替えがあるので、ぼくたちが同級生でいられるのもあとちょっとだ。

「四人そろって同じクラスって、やっぱり、無理^むだよなあ……」

ジャンボが言うと、ハマちゃんも「四年一組、最強^{さい}だったのになあ」と寂^{さび}しそうにならずいた。

「でも、クラス違^{ちが}ってても、オレたちずっと友だちだよな！」

タッチがガッツポーズをつくって、ぼくの肩^{かた}をポンとたたいた。

「なっ? ツヨシ」

「……うん」

²しよんぼりとうなずくぼくを見て、タッチは「なんだよ、ツヨシ、もう落ち込^こんでんのかあ?」と笑^{わら}った。「だいじょうぶだいじょうぶ、授業中^{じゅぎょうちゆう}は別^{べつ}のクラスでも、休み時間に廊下^{ろうか}に出たら、いつでも遊^{あそ}べるんだから」

「……うん」

「どうしたんだよ、ツヨシ、さっきから元気ないなあ」

元気なんて出るわけない。頭の中はマコトの³ことであっただい。

タッチたちには、まだ転校のはなしはしていない。べつに「ナイショだよ」とマコトに言われたわけじゃなかったけど、友だちにしゃべると、転校のことが「ほんとにほんとの、ほんとのこと」になってしまいそうな気がして……。みんなのおしゃべりは、今度は「女子の誰^{だれ}と同じクラスになりたいか」に



なった。

「オレ、マコトは同じクラスでもいいかなあ」とジャンボが言った。

タッチやハマちゃんも、うんうん、とうなずいた。

「あいつがいるとスポーツ大会とか優勝しそうだし」「オレたちが六年生に
 じめられてもタス^オけてくれそうだし」「コワそうな先生が担任^{たんにん}になっても、マ
 コトがいたらだいじょうぶだよな」……。

⁴ みんなのはなしを聞いていると、急に胸^{むね}が熱^{あつ}くなって、泣^なきそうになっ
 てしまった。
 (重松 清「くちぶえ番長」による)

1 線ア～オについて、漢字は読みをひらがなで書き、カタカナは漢字で書きなさい。

ア イ ウ

エ オ

2 線1「四人そろって」とありますが、四人の名前をそれぞれ文中からさがして
 書きぬきなさい。

<input type="text"/>	<input type="text"/>
<input type="text"/>	<input type="text"/>

3 線2「しょんぼりとうなずくぼくを見て、タッチは『なんだよ、ツヨシ、もう
 落ち込んでんのかあ?』と笑った」とありますが、タッチは、「ぼく」がどのような
 ことを心配して「落ち込んで」いるか。もっともふさわしいものを、
 ア～エから選^{えら}んで、記号に○をつけなさい。

- ア 「最強」のクラスがなくなってしまうこと。
- イ またみんなと同じクラスになること。
- ウ みんなと別のクラスになること。
- エ コワそうな先生が担任になること。



4 線3「マコトのこと」とは、どのようなことですか。次の□に当てはまることばを、文中から書きぬきなさい。

マコトが、五年生に進級する前に

してしまうということ。

5 この文章から、「マコト」はどのような女の子だということが読みとれますか。もっともふさわしいものを、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

ア おとなしくて、やさしい女の子

イ 自分勝手に、わがままな女の子

ウ 落ち着いていて、頭のいい女の子

エ 活発で、たよりになる女の子

6 線4「みんなのはなしを聞いていると、急に胸が熱くなって、泣きそうになってしまった」とありますが、このときの「ぼく」の気持ちを次のように説明するとき、□に当てはまるもっともふさわしいことばを、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

今までのマコトとの思い出がよみがえり、もう会えなくなるかもしれないと
 考えて、どうしようもなく□になっている。

ア かなしい気持ち

イ なつかしい気持ち

ウ うれしい気持ち

エ はずかしい気持ち



★次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

わたるは必死ひっしになって登りぼうをよじのぼった。 【ア】

「すすむ君の勝ち。」

と、下で声が出た。わたるがてっぺんへ着アくより少し早く、すすむが、ゴールしていた。

「二本め。」

わたるとすすむは、登りぼうをすべりおりて、息イをととのえた。

二本めは、わたるのほうが、わずかに早かった。

「よし、三本め、行こう。」

わたるは、勝ちたかった。すりきずだらけになって、いっしょうけんめいレンシューウしてきた。まゆの喜エぶカオが見たい。 【イ】

「用意。」

大輔だいすけが号令ごうれいをかけた。

「スタート。」

わっと、かん声があがった。わたるは、むちゅうで登った。

「すすむ君の勝ち。」

と、下で声が出た。 【ウ】

すすむは、登りぼうの上で、右手をあげて、Vサインアイをしようと、するするとぼうをすべりおり、ガッツポーズをして、とびあがった。

「やったー、ぼくが木登り名人だ！」

わたるは、登りぼうのでっぺんにつかまったまま、じっとしていた。くやしきで、なみだがぼろぼろでてきた。わっと声をあげてなきだしたいのを、



じっとこらえていた。【エ】

「わたる、おりてこいよ。勝負だから、しかたないだろう。」

下から大輔が、よびかけた。わたるはまだじっとしていた。大輔は、みんなにいった。

木登り名人は、すすむ君だ。

ジャングルネットの下に集まっていた三組のみんなは、帰ってしまい、大輔とまきだけが、のこっていた。

わたるは、登りぼうからおりた。だれとも話したくなかった。くちびるをかんで、校門のほうへかけだした。大輔が、

「教室にかばんを、おいてあるんだろう。どうすんだ。」
と、後ろからさげんでいた。

(大野 哲郎「友だちになれるかな」による)

1 線ア〜オについて、漢字は読みをひらがなで書き、カタカナは漢字で書きなさい。

ア	イ
エ	ウ
オ	

2 線「後」と同じへん(部首)の漢字で書き表すものを、ア〜エから一つ選んで、

記号に○をつけなさい。

ア ゴールをめざしてオヨギつづける。

イ 道のヨコに大きな木がある。

ウ つかれたので少しヤスむ。

エ ゴールでみんながマっている。



3 この文章には、次の一文がぬけています。どこに入れるのがもっともふさわしいですか。文中の【ア】～【エ】から選びなさい。

今度、すすむに勝てば、どうどうと木登り名人になれる。

4 線「わたるは、登りぼうのてっぺんにつかまったまま、じっとしていた」について、①、②の問いに答えなさい。

① このときのわたるのようすや気持ちとして、もっともふさわしいものを、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

ア 三組のみんながすすむをおうえんしたので、はらがたっている。

イ 勝負の判定はんていになっとくできず、もう一度やり直したいと思っている。

ウ 勝負に負けたことがくやくしくて、どうしようもなくなっている。

エ 登りぼうのてっぺんで風にふかれて、気持ちがよくなっている。

② これに対して、勝負が決まったあと、すすむはどのような行動をとりましたか。それが書かれている一文をさがし、はじめの五字を書きぬきなさい。ただし、「、」や「。」も一字とします。

5 この文章には、会話を表す「」をつけたほうがよいところがもう一か所あります。当てはまる部分をさがして、はじめと終わりの三字をそれぞれ書きぬきなさい。ただし、「、」や「。」も一字とします。

はじめ

終わり



文章題テスト・小説(5)

日 月 名前

★ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ずっとずっとむかし、修平しゅうへいという男の子が、夕ぐれどきの道を考えこみながら歩いていました。

修平は、なかのいい友だちと、学校のでらん会に虫かごをつくって出そうやと、やくそくしたのです。もともと修平は、手さきがきようでしたから、これはひとつ、あたりまえのしかくい、おりのような虫かごとはまったくちがう虫かごをつくってやろうと、思ったのでした。

「どんなのにしようかなあ。」

しきりと、首をひねりながら、まばらな林にはいろいろとしたとき、ふいに修平は、①、うしろにたおれそうになりました。

こしにさげていたべんとうはこのつつみがいきなり、ひっぱられたのです。「だれだあー！」

おこってふりむくと——だれもいません。やぶにひっかけたのかなと思って、修平は、歩き出しました。

すると、また！
くいくいっと、ひっぱられました。

修平は、②、ふりむきました。
やぶが、かさかさとなって、きいろいものが、さっとかくれました。

(ははあん、きつねっこだな。)
修平は、くすつとわらいました。

このあたりは、ときどき、きつねの出るところです。
修平は、さっさと歩いていきました。こんなときは、知らんぷりをしてい
るにかぎります。きつねにかまうと、ばかされると、おとなたちにいわれて
いますから。

(瀬尾七重「きつねの虫かご」より)

(注) まばらな林…木がちらほらと、間をあけて生えている林



① 線1「考えこみながら」について、次の①、②に答えなさい。
 ① これとほぼ同じ意味の言葉を、文中から八字で書きぬきなさい。

② 修平は、何を考えこんでいたのですか。次の文の□に当てはまる言葉を、十字でいどで書きなさい。

どんな ということ。

② 線2「あたりまえの」にもっとも近い意味の言葉を、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

- ア かんたんな イ ありふれた
 ウ わざとらしい エ りっぱな

③ ①、②に当てはまる言葉としてもっともふさわしいものを、ア～エからそれぞれ選んで、記号を書きなさい。

- ア かくんと イ ぶらりと
 ウ じっと エ くるっと
- ① ②

④ 線3「修平は、くすつとわらいました」とありますが、このときの修平の気持ちとしてもっともふさわしいものを、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。
 ア べんとうはこのつつみをひっぱったのがきつねだとわかって、楽しい気持ちになっている。

- イ 小さなきつねと遊ぶことができる、うれしい気持ちになっている。
 ウ やぶにかくれたきつねに、何とかいたずらをしかえしてやろうと、うきうきした気持ちになっている。

⑤ 線4「修平は、さっさと歩いていきました」とありますが、この理由を次のようにせつめいしました。①、②に当てはまる言葉を、それぞれ文中から五字で書きぬきなさい。

きつねにかまうと ① と聞いていたので、 ② をしようと思ったから。

①

②

